

みんなの童話

白い月のおはなし



サキとケイが、一緒に学校へ行くのは、久しぶりだった。

「ねえ、今からすてきなことが見えるの」

サキはそう言って、ケイに肩をすぼめて見せた。

「すてきなことって、なあに」

ケイは、何だかわくわくときどききいて聞いた。

「今からお月様が見えるの」

「朝のこんなに明るいときって、学校に行く途中の田んぼの道は、登り坂にさしかかるところから竹やぶになる。曲がりくねった道を登り切ると、空があたり一面ぱっと開ける。」

「お・つ・き・さ・まー!」

サキは呼びかけるように言った。

サキの指の先に、月が出ていた。

「わぁ、ほんと! 青空に、まっ白な月なんて、す・て・きっ」

サキは、この青空を見て、胸いっぱい深呼吸をした。

「雲ひとつない、良い天気」

ケイも続けて深呼吸をした。

「朝の光で、ひかる月が見えるって、い・い・ね」

「わたし、お月様大好きだもん」

サキは月に向かって目を細めた。

「月にはね。うさぎがモチをついているって、言っじゃない」

ケイが、おどけた。

サキは、学校で習ったと、得意げにはなし始めた。

「月は自分では光れないの。だからうさぎは見えない」

先生に聞いたことを続ける。

「月ってね、太陽からの光でひかって見えるのよ」

そして今坂の上に白い月がある。ふたりは、顔を見あわせてっこりした。

「わたしたち、昼間の太陽と月みたいに、久しぶりに会えたわ」

ケイが学校を休んでいた間、さみしかったのだと伝えた。

「わたしね。この月をどうしてもケイと一緒に見たいと、思ったの」

と、サキがケイの顔をのぞき込む。

「夜に出る黄色い月も好き。満月なら『わぁ、お月様』って思う。思わず手を合わせちゃうかな」

サキは拝む仕草をした。

「だからよけいに、昼間はとうって思ったの!」

サキは、真っ青な空を見上げ、月になった気分でした。

「わたしはね。月は太陽をずっと追いかけていると思う」

サキは、月の役を演じていた。

「きつと、月は太陽に追いついたらこういつの。『きみのように、わたしも光りたい。その秘密を教えてください』」

「それなら太陽が出ている間、ずっと追いかけるの!」

「でも、太陽は決してふり向かない。だって太陽は、自分だけできらきら輝いているから」

サキは、太陽を強くにらんでから、西の空の月を見つめた。

「月は、きつとさみしいの」

サキは、ぼそりとつぶやく。ケイは、すぐに答えた。

「すがたが見えないのは、そんなにさみしい? サキちゃんもっ」

サキには、わからなかった。

「でもね。月っていろいろな見方があると思うわ。おとき話のうさぎさんは、仲間とわいわいガヤガヤして、けっこうさみしくないよ」

と、ケイは言い放った。

「それに。いま月へは、人類が行けるようになったよ」

ケイが、月面旅行の話伝える。

「むかしから、月読みのミコトが、もの思いにひたっているって」と、神代の言い伝えも語る。

「神話の話になるの?」

ケイから聞かされて、サキは、『月』って本当にいろんな見方があると思った。ケイと一緒に来て、月へのあこがれが、よりこれから広がる気がした。

(いっしょっていいなあ。)

と、サキは、まっ白な月に向かって祈る気持ちで手を合わせた。

空は一面、真っ青だった。

月は、白色に、太陽は金色に、光っていた。

しろやま会員 かぐませい